

21世紀を 象徴する 協同組合

的場 信樹

(金沢大学助教授)

21世紀はいったいどんな時代になるのだろうか。

20世紀は「戦争と革命の世紀」といわれる。人類規模、地球規模で戦われた二つの世界大戦や、ロシア革命にはじまる一連の「社会主義の到来を予測させる革命」の衝撃がいかに大きかったかがうかがえる言葉ではある。

また、「19世紀は自由主義の時代、20世紀は民主主義の時代」といわれることもある。近代は人間の自由と私的所有権を求めて幕を開け、現代は平等な生活水準の保障と引き替えに大衆社会状況化、管理社会化し、世紀末の現在にいたって民主主義論の見直しが盛んである。

では、協同組合にとって20世紀はどのような時代だったのだろうか。20世紀の協同組合は流通協同組合だった。20世紀を代表する生協や、信用組合はいうまでもなく、生産者の組織である農協でさえ、化学肥料の共同購入や生産物の共同販売、信用事業など、もっぱらその機能を流通分野に限定する協同組合だった。

ところで、19世紀末労働運動内部の世代交代を背景に、生産協同組合にたいする流通協同組合の正当性を主張するために使われたのがロッチデール神話だった。ロッチデール神話の定着以後、百年におよぶそれまでの協同組合の歴史は、たんなるその前史とされた。事実は、1844年のロッチデールは協同組合の歴史の始まりではなく、ひとつの歴史の終わりだった。もともと協同組合コミュニティをめざしていた人々は、そのための手段として小売り事業をはじめた。そのひとつであるロッチデールでは、時代の制約もあって本来の目的は先送りされ、手段が目的に転化され、小売り事業がその象徴となった。

さて、20世紀の協同組合はいずれも、もっぱら流通部面において「規模の利益」を追求し、国民経済において有利な価格交渉力を獲得することによって組合員の取引条件や生活条件の向上に貢献してきた。つまり、20世紀の協同組合は大衆消費社会の登場を準備してきたのである。

ヨーロッパを中心に、大衆消費社会の登場以後その危機が叫ばれているのはこのような協同組合である。これにたいして、20世紀末に登場してきた新しい協同組合にはつぎのような特徴がみられる。

新しい協同組合は、その機能を流通分野に限定しない。むしろ、生産や消費という「機能」を対立的に考えるのではなく、目的に応じて「機能」は総合化される。新しい協同組合は、国民経済の枠にとどまらない。フェアトレードのように国境を超え、環境問題のように市場を超える課題にも取り組む。

新しい協同組合はかならずしも「規模の利益」を追求しない。人間を売上高のように「固まり」としてはみない。「協同」の本来の意味である「人間の関係性」を重視する。「固まり」を大きくするのではなく、「関係性」の質を向上させることによって、構成員の能力を高め、目的を実現しようとする。「関係性」には、言葉の本来の意味から一方的な依存関係はありえないから、ここでのキーワードは「自立と協同」である。「自立と協同」を直接目的とする共同作業所や高齢者協同組合のあり方に、21世紀の協同組合を象徴させることができるのではないだろうか。